

## 巻頭言 新病院長ご挨拶

大阪医科大学附属病院 病院長  
内山 和久



平成28年4月1日付けで大阪医科大学附属病院長を拝命致しましたので、一言ご挨拶を申し上げます。大阪医科大学は来年90周年を迎えますが、この長い歴史と伝統は主に9,243名の同窓生の多大なご尽力に支えられてきました。その附属病院は29の診療科と14の中央診療部門を持つ、862床の北摂地域の中核病院として、2,000人余の病院スタッフに支えられて成長し続けています。

この春には大阪薬科大学と法人合併し、大阪医科薬科大学となり、薬剤部門、薬学臨床研究、薬理教育などに新発展が期待されます。法人は日常よりsustainability（社会・環境の持続的な発展のための責任ある行動）の実践を提唱しています。大学の基本的な役割は、「診療・教育・研究」が3本柱ですが、附属病院としては診療の充実が中心となります。具体的には安全性が高く患者様に信頼される魅力ある病院づくりに集約されますが、群馬大学不祥事事件などから、厚労省の通達を受けてこの10月から「医療安全推進部」に「医療安対策室」と並列して、新しく「医療管理室」が設置され、専従の医師を配置してDPC教育とともに医療の質の向上を図ることになりました。また大学病院への自浄作用を目的とした「内部通報窓口」の設置が義務化されます。

高槻市内での救急充足率は98%と非常に高いですが、主たる搬送病院は高槻病院と東和会病院で、大阪医大への救急搬送比率はわずか10%前後と少なく、さらなる救急対応が望まれています。とくに高槻市には市民病院がなく、現在は三島地区の市民病院的な役割も課されています。しかし、2025年に向けて、厚労省の提唱する地域医療包括化構想が推進されて病院の役割分担が明確化すると、本院は「高度急性期病院」となります。つまり特定機能病院として高度な先進医療を提供する専門病院として義務化され、市民病院的な役割は近隣病院にお願いすることになります。幸い大阪医科大学には三島南病院が新設され、「急性期」「回復期」「慢性期」患者を担当、「検診部門」を健康科学クリニックで、「在宅医療」を訪問看護ステーションでと役割分担されつつあります。

本年3月には病院西側に6階建ての中央手術棟が竣工しました。2,3階に計20室の手術室と16床のICU、そして4階には胸部外科病棟、5階には消化器外科病棟が配置されています。とくに3階にはハイブリッド手術やロボット手術室など最新技術が導入された結果、外科医の評判も上々で、対外的にも注目されています。さらに5年後には現在の5号館と臨床講義棟を取り壊し、最新設備を導入した12階建てのメインタワーが建築される予定です。この2年は各科の先生方と具体的な病棟配置を考えることになります。

「社会のニーズに応える安全で質の高い医療を皆様に提供するとともに、良識ある人間性豊かな医療人を育成します」という本院の理念を実現すべく、先生方とともに、患者さまとご家族に安心と安らぎを与えられる病院を目指して日々努力したいと思っています。